76

陽虚としての盗汗について

吉岡　広記
日本鍼灸研究会

緒言　盗汗（古くは寝汗）は，『傷寒論』に初出し，六朝以降に多用された病證である．ただし，傷寒によるものを除けば，「由陽虚所致」と規定した『諸病源候論』巻三・虚労盗汗候に基づく陽虚原因説と，張介賓が『景岳全書』巻十二・雑證謨・汗證・論證の中で「諸古法云，自汗者，属陽虚．……盗汗者，属陰虚」と指摘する陰虚原因説，あるいは陰虚と陽虚の二證を併存させる論などが存在する．ただ虚労盗汗候には陽虚の規定がないため，例えば李梴が「睡則衛気行於裏而表虚，醒則気散於表而汗止」（『医学入門』巻四・雑病分類・虚類・汗）と述べるように，諸家は昼夜の衛気の運行と起臥の関係を示した『霊枢』営衛生会篇や口問篇などにその解釈の根拠を求めてきた．しかし，夜に衛気が陰（裏）を巡るのは生理的な変化であり，これを以て陽虚とみなすことには無理がある．よって『諸病源候論』虚労盗汗候における陽虚の考察を試みる．

発汗の機序　発汗は同巻・虚労汗候において陽虚によるとされる（「陽気偏虚，則津液発泄，故為汗」）．この陽気は，腠理（膚腠）を開闔する衛気，及び出続けることで損なわれる心気（「汗多則損於心，心液為汗故也」）と解せられる．同巻・大病後虚汗候では，次の段階として多汗により衛気も心気も損なわれた陽虚の極たる亡陽に至ること，具体的には身体を栄養する血のもととなる津液の枯渇と痩損が示されている（同巻・虚労不得眠候「栄気者，泌其津液，注之於脈也．化為血」，虚労羸痩候「夫血気者，所以栄養其身也」，「汗多亡陽，則津液竭，令人枯痩也」）．もちろん虚労盗汗候でも，長期的には同様の状態に至るとあるが，陽虚が盗汗を生じる説明にはなっていない．

陽虚の用例　陽虚の理解をさらに深める糸口は，発汗の機序の似通った大病後虚汗候（「復為風邪所乗，則陽気発泄，故令虚汗」）と同巻・風虚汗出候（「風入於陽，陽虚則汗出也」）を比較することで見えてくる．両者は病後であるか否かの差はあるものの，いずれも風邪により陽気が傷害され汗が出る点で一致する．注目すべきは，その表現である．一方は「陽気発泄」と言い，もう一方は「陽虚」と言うことから，陽邪たる風邪により引き起こされる「陽気〔が盛んであるが故の〕発泄」＝「陽気妄行」＝「陽虚」と解せる可能性がある．また，これを推し進めれば，次の段階として「〔陽気発泄による〕陽気の不足」＝「陽虚」を設定することも可能である．両者には自ずから寒熱（冷熱）の別はあるが，陽虚とは，要するに「陽気の不足」のみならず，「陽気の虚盛」，ひいては広く「陽気の〔働きの〕失調」を含む表現，と考えられないだろうか．「陽気（衛気・心気）の虚盛」による證という点で関係の深いと見られる同巻の虚労不得眠候，大病後不得眠候，病後虚腫候，虚労脈結候を検討することで，それは首肯される．「陽気妄行」に該当するのは，虚労不得眠候，大病後不得眠候である．ともに邪気ないし大病により生じた陰気虚（「蔵府虚」，「衛気不得入於陰」）＝陽気盛（「衛気独行於陽」，「心熱〔心気盛〕」），換言すれば衛気妄行の状況にある．逆に「陽気欝滞」に該当するのは虚労虚腫候と虚労脈結候である．虚労虚腫候は，風湿による陽気虚（「膚腠閉塞，栄衛不利，気不宣泄」，言わば気鬱）のために陰気盛（「津液澀」）となり，「虚腫（浮腫）」が生じる．虚労脈結候は，血気衰少による陽気虚（「脈雖乗気而動，血気〔栄衛〕虚則不能連属」）である．このように，「陽気の虚盛」による「陽気の働きの失調（活発不活発）」が，諸證を生じさせる．『諸病源候論』は，当該の病論のみを読むだけで理解できる記述法から，これまで一種の症候辞典のように扱われてきたが，病の時間的な連続性や軽重の相違という視点から前後の病論を併読することで構造的に理解できる箇所がある．

結語　陰気盛になるべき夜に，衛気が陰に行かず陽を巡る故に陽気が盛んとなり，発泄して寝汗する．陽気発泄の持続により陽気が不足し，最終的に亡陽による枯痩に至る．なお，「陽気妄行」による虚労不得眠候，大病後不得眠候は，陽気盛であるがいまだ発泄せざる，盗汗の前段階と言え，陽虚に至る原因や盗汗を生じる過程を考える上で参考となる．陽虚は，陽気の働きの失調や虚盛の推移を示していると見るべきである．